カダハク 2021
紀の国わかやま文化祭事業

開催期間　10/30(土)～11/21(日)

『虚構のアーカイブ』
サイズ：直径 12m 円形状のキャンプファイヤー跡地
使用素材：撤去された公園遊具
保存期間：文化祭終了後も常設展示

造形作家 石田真也

【プロフィール / 活動履歴】
1984年　和歌山県生まれ
2008年　大阪成蹊大学芸術学部テキスタイル学科卒業
「みえない力」をテーマに、主に廃材(不要となったもの)を素材にし、作品を制作している。
2020年6月～NHK「天才てれびくん hello」にて小道具を担当。

関連資料ジャンルのご案内

2F
料理　旅行　住まいと暮らし　美容・健康
ファッション　スポーツ・アウトドア　趣味実用
音楽　ビジネス　IT　ティーンズ　文学
新聞・雑誌　和歌山ことはじめ　有吉佐和子文庫

3F
総記　哲学・宗教　歴史　社会科学
自然科学　医学・薬学　技術・工学
産業　芸術　言語　郷土資料
参考図書　移民資料室

4F
児童書

編集後記

和 the も 4 号目になりました。今回は「芸術の秋」をテーマに和歌山市の造形作家 石田真也さんを取材しました。取材の中で特に印象的だったのは、「作品に不完全さを残すことで、見る人の数だけたくさんの捉え方が生まれる」ということです。完璧なものを見るのもいいですが、想像する余地のある部分を残した作品を見ることで、その人だけの感じ方が生まれるのは素敵だと思いませんか？

今後、石田さんの活動が引き継がれていけば、いつか「廃材」という概念がなくなる未来が来るかもしれませんね。

和歌山市民図書館
WAKAYAMA CIVIC LIBRARY

〒640-8202　和歌山県和歌山市屏風丁 17 番地
TEL：073-432-0010
開館時間：9:00～21:00

図書館の詳しい情報はこちらから

ホームページ　Instagram　facebook

和 the
ワーザ
WAZA for Local

4
2021.10.1 発行
TAKE FREE

廃材の見えないチカラを引き出す取り組み

取材協力：造形作家 石田真也さん

和歌山市民図書館
WAKAYAMA CIVIC LIBRARY

廃材の見えないチカラ

2021 年秋に和歌山で開催される、紀の国わかやま文化祭 2021。そのプログラムのひとつ、「カダハク 2021」に取り組む造形作家、石田真也さんを取り上げます。
身の回りで必要なくなったもの、いわゆる「廃材」を使い、造形作品を作る石田真也さん。
必要がなくなったものになにか新しい意味をもたらすことができれば素敵ではないですか？その「廃材」の見えないチカラを引き出し、別のものへ価値変換する取り組みについてご紹介します。

廃材の魅力を引き立てる

2つのズレ

石田真也さんの世界観

場所のズレが廃材の見え方を変える

造形物に使用する廃材は、石田さん自らが収集しています。拾う場所は海辺や山の中、国内や海外などさまざま。その理由は、廃材を拾う場所によって、その土地の特有さがあり、場所が違うと廃材の見え方が変わるからです。それらを組み合わせ作品にすると、作品内で「場所のズレ」が生じ、その土地の文化や特性、更には信仰心なども見えてきます。
例えば、海のない街に、海辺で集めた廃材を使用した造形物を展示することによって、その土地にはなじみのないものが魅力的に映ったり、作品を細部まで見てイメージを引き立てることができます。その土地ごとに拾い上げる廃材が、その土地を表す作品となり、廃材に再び価値が宿ります。

友ヶ島の魅力を発信するため

修験 軍事 生活 の 3つの側面 を想起させる

『カダハク 2021』友ヶ島アート展示

友ヶ島に備わった魅力

沖ノ島、神島、虎島、地ノ島を総称して友ヶ島。古くは役行者に始まる修験道にまつわる史跡や行場が現存し、要塞時代を偲ばせるレンガの砲台跡が点在。約 400 種の植物に囲まれた要塞の廃墟の様子からラピュタの島とも呼ばれる自然豊かな島です。

石田真也さんが感じた友ヶ島の見えない魅力

友ヶ島に初めて足を踏み入れた際、どこか取り残された場所という印象を受けた石田さん。
そんな、不完全さが魅力として残る場所に調和するように、完成されたものではなく、どこか不完全さの残る作品を作ろうと思われたそうです。そうすることで、作品を見る人それぞれの感じ方やイメージ力を尊重することができ、はじめて完成品につながるのではと石田さんの直感が働きました。

石田真也さんと和歌山

石田さんは、大学進学を機に一時期は京都に住んでいましたが、離れた場所で暮らす中で故郷・和歌山のことを想うようになりました。和歌山の魅力は、地元を愛している人が多いこと。その空気感にアートが加わることで和歌山にしかない世界観を表現していきたいと考えます。「いつかアートを身近に感じられる街になってほしい」と石田さんは語ります。

時間のズレが廃材に新しい価値を生む

「Raven Syndrome」
Installation_view/Denmark

「the world's mask
～ Ehime ～」

「祭鏡 09」

「一度不要になったものだからこそ使うのが面白い」と語る石田さん。
その理由は廃材のもつ「時間のズレ」にもあります。いらなくなったものを拾い造形物に使用することで、廃材の命は延び、違う形となってまた人々の目に触れるようになります。そこには、一つ一つの廃材に眠る記憶を呼び覚ますことで新しい価値のある作品となり、それとは対象的に過去の記憶を思い起こさせる力もあります。そこには真新しいものではなく、どこかで誰かが使っていたという「思い出」や「かすかな記憶」が詰まった廃材だからこそ新しい価値を見い出せます。